

転生者はチートを望まない

登場人物紹介

フィルセリア

国王の孫。
アインセルダの妹。
ツンデレかつブラコン。
人見知りな一面がある。

アインセルダ

国王の孫。金髪碧眼の
THE王子様。
魔術学園に通う
女子たちの憧れの的。

ガイ

火の魔法を操る、
ミラの幼馴染み。
兄貴風を吹かす、
わんぱく少年。

スイン

地の魔法を操る
宮廷魔術師。
ミラたちの旅を
サポートする。

ディーネ

水の精霊。
おしゃまな
性格。

サラ

火の精霊。
わんぱくな
性格。

グノー

地の精霊。
のんびりとした
性格。

ルフィー

風の精霊。
悪戯好きで
おてんばな
性格。

ミラ

魔法世界に転生した日本人で、
火・水・風・土すべての魔法を操る。
体力はないが、魔力値は最強。
幼馴染みのガイと共に
魔術学園に通う事に。

プロローグ

ぽかぽかとあたたかい日差しを受けながら、わたしは村の中をお散歩中。

お母さんが、もうすぐラボの実が熟すからジャムが作れそうだって言っていた。わたしはラボの実がだいすき。ラボの実のジャムもだいすき。だからうれしくなって「ラン、ラン」とときどきな歌を歌った。お母さんもよく料理中に鼻歌を歌ってる。でも同じ歌を歌っているのを聞いたことがない。

「どうして？」って聞いたら、「即興だからー」だって。

「そっきょうって？」って聞いたら、二人のお兄ちゃんとお姉ちゃんが、「適当な思いつきの事」って教えてくれた。そのあと上のお兄ちゃんはお母さんに、むにーってほっぺたをひっぱられていた。「代表してお仕置きー」だって。

お母さんのお仕置きは、むにーなの。お兄ちゃん、何しちゃったのかな？

お母さんとお姉ちゃんとおばあちゃんは今、布を織って染めるお仕事に行っている。お父さんと二人のお兄ちゃん、おじいちゃんは小麦畑に向かった。未っ子のわたしはお仕事のジャマをしないうで、元気に遊んでいるのがお仕事。もうちょっと大きくなったら、お手伝いできるようになる

かな？

村外れまで歩いて来たら、薪を担いだクーガーさんに会った。

「こんにちは、クーガーさん」

ペコリとおじぎをして、「ごあいさつ。あいさつは大事って、お父さんが言ってた。

「よう、ミラ。ちゃんと挨拶が出来てえらいな。上の兄弟と歳が離れていると、こうなるもんかね？ いや、ガイも一番上の兄弟とは歳が離れるか……なら違うか」

よくわからないけど、クーガーさんは硬い手でグリグリとわたしの頭をなでてくれた。

わーい、ほめられた。

クーガーさんはイルガ村唯一の鍛冶屋さん。火の精霊さんの力を借りて、魔法を使うの。若い頃はまもの退治とか、お薬の材料を探すお仕事をしてたけど、酷いケガをしまして、お家のお仕事を継いだんだって。

まものど戦うのは怖いけど、魔法は使ってみたい。精霊さんに会ってみたい。精霊さんってどんな姿なのかな？ キラキラしてるかな？ 精霊さんをみるにはとくべつな目が必要らしい。クーガーさんはみたことがないんだって。

「今日は一人で散歩か？」

「うん。今日はガイ、空き地でボール投げするんだって」

ガイはよく一緒に遊んでいる幼馴染みの男の子。

「ガイもたまには男同士で遊びたいのかね。一人で大丈夫か？」

「だいじょうぶ。それにわたしは確かに身体が弱いけど、お散歩くらい一人でできるよ。いつもガイと一緒にわけじゃないよ」

「そうか。でも日差しは暖かくてもまだ冬だからな。風邪をひかないうちに帰るんだぞ？ じゃ、俺は仕事があるから」

クーガーさんはそう言って、おうちの中に入っていった。

大人はいつもわたしとガイをセットで扱う。家がおとなりで、生まれた時から一緒にいるからかなあ。お兄ちゃんやお姉ちゃんだって、よくわたしと遊んでくれるのに。今はお父さんやお母さんのお手伝いが忙しくて遊んでくれないけど……

「ちよつとガイのとこ行ってみよつと。見るだけ。見たら帰ろつと」

ほんの少し寂しくなったわたしは、お散歩コースを変更する。空き地をのぞいて帰るだけ。クーガーさんが、「たまには男同士で」って言ってたから、ジャマしちゃいけないよね。

走るとすぐに息が苦しくなっちゃうから、早足で空き地に向かう。そこでは八人くらいの男の子と、おてんばでゆうめいな女の子が一人いた。みんな楽しそうに走り回っている。

女の子、いるじゃない。

ちよつとおもしろくない。でもわたしはあまり走れないからボール遊びはできない。

「帰ろ」

くるりと背を向けて歩き出したその時、ガイの声が聞こえた。

「あぶない！」

目が覚めた私は、木目の天井を目にして首を傾げた。

普通、病院の天井って白くない？ ていうか、蛍光灯がない。ベッドも硬い。

どうやら私は薄暗い木造の部屋の中で、寝心地の悪いベッドに寝かされているらしい。奇妙に思っているりと見回すと、テーブルの上に燭台がある。

病院じゃないのかな？

でもあの勢いで突っ込んで来た車にはねられれば、普通死ぬでしょ。どんなに打ちどころが良くても重傷。運動不足で牛乳嫌いな私の骨はきつとスカスカだ。何本も骨が折れて臓器に突き刺さって……って気持ち悪くなってきた。想像するのはやめよう。

ともかく、目が覚めたからには助かったんだ！ でもどうして病院じゃないんだろう。しかもなぜか、頭以外に痛みがない。

不思議に思いながら起き上がった途端、ドタバタと足音が部屋に近づいて来た。バンツと大きな音と共に扉が開かれる。

「すまんミラ！」

開口一番、少年が謝罪を口にした。髪と瞳が赤い少年を見て、私は理解する。

「……異世界転生ってあるんだ」

「頭大丈夫じゃなかった!？」

とりあえず、かったいマクラを投げつけておきました、まる。

第一話

さて、現状を整理しよう。

まず、私の名前はミラ。苗字にあたる家名はない。平民には家名がないのがこの世界の常識である。

農家の次女で、四人兄弟の末っ子。十日後には六歳になる。

家族は祖父母と両親、十五歳の姉と、十四歳、十三歳の兄が二人。私だけずいぶん歳が離れている。

今世の私は猫っ毛で、色は金髪。瞳はペリドット色。映りは悪いけど、農家の我が家にも鏡はあった。なので色合いは間違いない。

前世は黒髪黒目の日本人だったから、今の外見はずいぶん華やかに感じる。我ながら将来が楽しみだ。美容には気をつけねばなるまい。

そういえば前世では、私はストレス性の胃痛持ちだった。血を吐いた事はないし病院に行った事もなかったけど、いつも胃薬を携帯していた。こっちの世界に胃薬はあるだろうか。ストレスをためないようにしないと、子供の頃に胃潰瘍なんて事になりかねない。気をつけなくては。って、考えすぎもストレスの原因か。いかんいかん。

先ほど部屋に飛び込んで来たのは幼馴染みのガイ。十一ヶ月年上なだけなのに、兄貴風を吹かすお子様。村にはガイの弟分妹分がいっぱいいる。

そして私が気を失って寝かされていたのは村長宅。気を失った原因は、ガイの投げたボールが側頭部にヒットしたからだ。

ボールと言っても、カラーボールみたいなゴムボールじゃない。この世界にはゴムなんてないからね。丸く削った木にボロ布を巻いた物がボールだ。当然、頭にぶつけて良い物ではない。

ガイは男友達——一人は女の子だけ——と遊んでいて、ボールを暴投。帰ろうとしていた私の頭に、ぶち当ててしまったというわけだ。

そのおかげで思い出さなくていい事を思い出してしまった。しかも中途半端に。

前世の名は不明。性別も不明。家族構成も不明。だけど就職氷河期に大学を卒業し、就職浪人となりながらも、なんとかパートとして働いていた事と、軽く中二病を患っていた過去を思い出してしまった。

いーやー！ 消したい抹消したい！ 特に後半のイラナイ黒歴史！ 神様、ちゃんと仕事しろ！
ゼイゼイ。

つか、思い出した原因は、やっぱりあれだよな。頭部への衝撃。

前世の死因は、間違いないあの自動車事故だ。背後から突っ込んで来た自動車にはね飛ばされて、頭でも打ったんだろう。頭部への衝撃という共通点が思い出したきっかけに違いない。

「早く広場にいこうぜ、ミラ」

村長さんに手当のお礼を言わなくては、とベッドから降りた私の手を、幼馴染みはグイグイ引っ張った。

「頭が痛いから、ゆっくりね。あと帯を結びたいし、上着も着ないと」

「うう、ゴメン。でものんびりしたら、学園からのちよーさたいが帰っちゃうかもしれない」

「調査隊？」

怪訝な私の声に、ガイは唇を尖らせた。

「さっき言ったろ？」

「ごめん、現状把握中だったから、右から左に聞き流してた。」

私はワンピースの皺を伸ばし、ベッドサイドに置かれていた帯でウエスト部分を結ぶ。けれどいまいち綺麗に結べない。

「今日は魔術学園から、生徒のせんばつしけんをするために調査隊が村に来るんだ。都からは毎年たくさんの子供が入るけど、イルガ村みたいな農村じゃ子供は働き手だろ？ ひよつとしたら魔術師の卵がいるかもしれないのに、農家に埋もれるのはもったいないから、三年毎に探しに来るんだって。それにじよせーきんつてのが出るから、家族や村も助かるんだと」

ガイがもう一度説明してくれるのを聞きながら帯を結び直すのが、何度やっても上手くいかない。おつかしいなー。いつもお母さんが結んでくれるのを見てるのに。なぜか縦結びになっちゃう。

「……後で村長夫人か、お母さんに直してもらおう」

縦結びになった帯は放っておいて、フードのついたポレロのような上着を着る。すると、再びガインに手を引かれた。

しかし三年に一度とはいえ、人材発掘にまめな国だ。戦力や技術開発に有用な魔術師を国家事業として育成して囲い込もうってわけね。今は貧窮していなくとも、いざ飢饉になった時に子供を売ったり、口減らしするくらいならって事で、村や家族は承知しているのだろう。うん。ありがたい話だ。

そして異世界転生モノのお約束として、私に何らかの特殊能力——この世界には魔法があるから魔法に関しての能力かな——が発覚した場合を想像してみる。

でも、チート取得イベントの記憶はないんだよね。抜け落ちてるのか、元々なかったのか。転生時に神様と会っていたなら、チートと引き替えに面倒な使命を託されていそうだけど。

ん？ なんだらう。何か引っかけた気がする。大事な事だったような……

「なんだっけ？」

「何がだ？」

つい口に出してしまった言葉に、ガイが訝しげに振り返る。

「んーなんでもない」

説明出来る事じゃないから、首を横に振って誤魔化した。

ま、いいや。大事な事ならそのうち思い出すでしょ。気にしな—い気にしな—い。気にするとストレスの元になるぞ、私。

それよりチート能力があると、どうしても目立つ。目立つとトラブルが寄って来る。それはとても面倒くさい。面倒事はゴメンだ。だって今世の私は、前世よりも身体が丈夫ではないみたいなんだから。

イルガ村のあるフィメラリア王国はユランシア大陸の西端にある国で、イルガ村はその北東部にある。四季はあるけど、一年を通して比較的温暖な気候。冬でも若干寒いかなという程度だ。そのかわり夏場は酷暑と言っても良い日が三ヶ月近く続く。それなのに、私は季節を問わず風邪をひくのだ。

ちなみにこの世界の一ヶ月は二十八日。一日は二十四時間。一週間は七日。曜日存在せず、第一週×日……といった具合に呼ぶ。休日は毎週七日目。一ヶ月は四週間、一年は十二ヶ月。一月が新年で、学校は一月が新年度の始まりとなっている。

一ヶ月の日数が地球よりも短いのと、新年イコール新年度というのが日本とは違うけど、わかりやすく助かるね。あと、極寒の国でなくて良かった。

閑話休題。

身体が丈夫でない私は、ストレスをためると胃痛になる可能性がある。これまでのミラならば胃痛に苛まれる事なく、身体が弱いなりに学園生活を楽しめたかもしれない。けれど今の私は学園と聞くと、まずイジメを連想してしまうのだ。

いったい前世で何があった私。思い出すのが怖い。ていうか、考えちゃ駄目だ私。ストレスになる。

魔法には憧れるし、学園にも興味があるけれど、今回の試験はパスだ。体力がなさ過ぎる。三年後の試験までに、まずはラジオ体操でもして身体を鍛えよう。

でも、魔法を学ぶだけなら学園に拘る必要はないと思うんだよね。体力が足りたら、クーガーさんに弟子入りするのはどうだろう。彼は若い頃、村を出て魔物退治をしていたらしいし、火の魔法も使える。

ただし、学園に入らないと助成金は出ない。それだけはちょっと惜しく思う。

もし仮に私が試験に合格して、学園に入って助成金が出れば、家族の多い我が家は助かるだろう。美味しい話だが、やっぱり今すぐは困る。体力も心配だけど、今世の身分制度や慣習に慣れる時間が欲しい。

それに三年後なら、記憶の穴も埋まっているかもしれない。お約束通りチートを持っていたとしても、他人の目から隠す対策を立てられる……はず。たぶん。

「オレへの説教が終わって、村長さんはもう広場に行ってる。六歳以上で三年前の試験を受けていない子供なんて、オレ達の他は十人もいない。早く行かないと調査隊が帰っちゃう」

私がアレコレと考えている最中も、ガイの頭の中は調査隊の事でいっぱいだったようだ。

にしても、良い事を聞いた。学園の受験資格は六歳からか。それなら私は対象外だ。今、五歳だもの。

「でも魔術師の卵を探しに来てるんだから、取りこぼしはしないんじゃないの？ てか私はまだ五歳だから関係ないし」

「でも村長がオレへの罰で、試験を受ける子供はこれだけですって言い切ったら、終わりだろ？」
歳の件はスルーですか。いいけどね。十日後には六歳だし。試験の対象外なのは変わらないけど。ちなみに前世の歳を合わせれば……享年何歳か思い出せないけど、大卒だから二十二歳以上。それに五歳足せば二十七歳。アラサーだ。計算して微妙なシヨックを受ける。

いやいや、二十七はまだ若い。男は三十歳から。女は三十歳まで。って言うし。あれ、前世も女だったら、もうそろそろヤバイ？
なら、人間として脂かのおつてくるのは男は三十五。女は三十。でどうだ！ ふつ、これならたとえ享年何歳だろうと恐くない！

「国つてどこの村に子供が何人いるかとか、調べてないのかな？」
歳の件は一応の着地点を見つけ、問題をガイのハブられ危機に移す。もちろん、国勢調査なんて単語は使わない。ガイが理解出来ないからではなく、前世の単語だからだ。

保身のためにも、余計な事は口にしないに限る。
それはともかく、国勢調査をしているから、ド田舎のイルガ村にも調査隊が来てるんじゃないのかな。そしたら、まだチェックしてない子がいるのはバレバレだし、村長もお上の意向に逆らったりしないだろう。助成金っていうメリットもあるんだし。

ガイにわかるように説明すると、彼はなるほどと頷いた。
うむ。理解してくれて何より。だからあまり強く手を引っ張るな。早く歩くと、振動がボールをぶち当てられた頭に響くんだよ。

ガイが部屋に飛び込んで来た時のまま、開けっぱなしだったドアをくぐり抜けて廊下に出る。リビングのドアを押し開けると、私のお母さんとガイのお母さんが、村長夫人とお茶を飲んでいて。

「お母さん！」

私が頭を打つたと聞いて、お母さんは仕事場から呼び出されたのだろう。大事ではないとわかって、みんなでお茶をしていたところか。

お母さんが来ているだろうと予想はしていても、実際にお母さんの姿を目にすると嬉しくなっていて、ガイの手を離して駆け寄った。

今世の母の名前はナーラ。十七歳で父エギルと結婚し、十八歳で長女エマを出産。現在三十三歳のおおらかな母である。

「あらあら、目が覚めたのねミラ。よかったわ」

「ごめんなさいねえ、ミラちゃん。うちの馬鹿がケガさせちゃって」

お母さん達はワンピースの裾を揺らしながら立ち上がった。

別にワンピースが流行っているわけではない。この世界——少なくともうちの村の女性服はワンピースなのだ。

シンプルな縫製で、スカートの丈は足首が隠れるほど長い。生地は単色で、柄物もない。

けれど装飾性がまったくないわけでもない。村の女性は腰に結ぶ布帯でお洒落を楽しんでいる。

結び方を工夫したり、紐を編んだり、色のついた石をつけて飾りベルトにしたり……刺繍を入れる事もある。

ちなみに男性は上衣の丈が腰、もしくは膝くらいまであって、下衣はズボン。ベストを羽織る人もいる。腰には布帯。帯を飾り帯にしている人はほとんどいない。

服のどこかに刺繍が入っている場合は、大抵恋人や妻からの贈り物らしい。母親の手による刺繍ではないのが自慢になるんだとか。

けれど思春期の男の子の中には、自分らしさを追求して、コツコツ自作する者がいる。オトメンだ。たまーに女の子にプレゼントされた嘘をつく者もいるが、見栄を張ったところですがすぐにバレルのがうちの村の怖いところである。黒歴史誕生の瞬間だ。

更に外出時の必需品として、フードつきの上着かベール、もしくは帽子がある。夏場は特に日差しが強いから、老若男女絶対に必要だ。農作業時に被っていないかつたら、命にかかわるとも言われている。お弁当を忘れても、水と日除けは忘れるな、という標語があるほどだ。

この世界の衣装のイメージはアラブ系かな？ ベールの印象が強いから。

お母さんは私のたんこぶに触れないよう、そつと頭をなでてくれた。

ガイの投げたボールが私の頭を直撃し、村長さん宅に運び込まれた事を、仕事場に駆け込んで来た子供——ガイと一緒に遊んでいた子供——に知らされたお母さんは、大急ぎで駆けつけてくれたらしい。職場が同じガイのお母さん、イーナさんと一緒に。

「そうだお母さん、帯、結び直して欲しいな」

「あら縦結び」

お母さんは帯を解いて、手早く結び直してくれた。

「ミラちゃんが起きたなら、お茶を淹れ直そうかね」
村長夫人がよいしょと立ち上がって、竈に向かう。

「心配かけてごめんなさい」

「本当よ。でも気を失っているだけだって聞いて、安心したわ」
帯を結び終え、お母さんは軽く私を抱きしめて笑う。

実は前世の記憶が戻っちゃったただけだね。でもお母さんが喜んでいのに水を差すのはよくないと思つて、余計な事は言わない事にした。

「さて、お茶が入ったよ」

「ありがとう、バーサさん」

「ミラー、お茶飲んでる場合じゃないって」

大きいポットとコップを二つ運んで来た村長夫人にお礼を言つて手を伸ばすと、ガイに横合いからその手を取られた。

「広場に行かなきゃだろ」

「ああそういや、ガイは六歳だったかね」

「でもミラちゃんは五歳よ。試験は三年後。受けるならあんた一人で行つて来なさいな。受かるとは思えないし、私は付き添わなくてもいいでしょ？ 仕事に戻らないと」

やっぱり私は次回の参加でいいらしい。なら、私はお茶をいただきたい。喉が渴いた。
「落ちるのぞんてーかよ。まあいいけどさ」

イーナさんの言葉にガイは唇を尖らせてむくれたけれど、あっさり受け入れた。けれど私の件は譲れないらしく、更に言いつのつた。

「でもミラももうすぐ六歳なんだから、オマケして試験してもらえるかもしれないだろ」

国の仕事にオマケはないんじゃないかなー。と思つたのは私だけだったみたいで、大人達は顔を見合わせ、「じゃあ駄目元で行つてみましょうか」と言い出した。

「でもその前に、お茶の一杯くらい飲んで行きな。せつかく淹れたんだから」

「ありがとうー！」

「ミラーー!!」

私は満面の笑みでコップを受け取り、お茶を注いでもらった。ガイが恨めしそうに呼ぶけど華麗にスルー。大丈夫だつて。お茶を一杯飲んでたくらいで試験を受け損ねたりしないよ、たぶん。

「ミラちゃんが行くなら、うちの暴走しないように見張らないと」

仕方ないと言わんばかりに、イーナさんは盛大に息を吐いた。

ずいぶん言われようだな。末っ子のヤンチャ坊主なガイだけど、いったい何をすればここまで信用されなくなるのやら。ちよつと同情してしまう。

「そうそう、調査隊の皆さんは今夜はうちに泊まつて頂く予定だから、もし広場での試験が終わつてたら戻つて来なよ。ここで試験を受けられるか聞いてやるから」

村長夫人の温かい見送りを受けて、私達は広場へ出発した。

村長さんの家から広場までは一本道だ。一般の住民の家は村の中央部に建てられていて、ケーガーさんのように火をガンガン使ったり、村の防衛を請け負ったりしている人の家は、村の外縁部にある。

前世で読んだ異世界転生小説は、街並みが中世ヨーロッパ風の世界だったけれど、この世界は中世ヨーロッパ風ではなかった。

家は木造で通気性の良さそうな構造をしている。ログハウスというか……古民家？

内心首を捻りつつ、私はガイと一緒に歩く。私達が広場に出ると視線がいつせいに注がれた。

そこにいたのは村長さんと、六歳から八歳の子供が七人、その母親達、そしてフードつきマントの男と、鎧を着た四人の騎士達。マントの男と騎士が調査隊だろう。意外と若い人達だった。あとは野次馬な暇人——もとい見守る村人達。

う、怖い。見るなよお。前世では仕事と趣味の図書館通いぐらいでしか外出しなかったプチ引きこもりにとつて、沢山の人の視線は怖いんだよ。

「ミラ、目が覚めたのじゃな。気分は悪くないかい」

「あ、はい村長さん。タンコブが痛いけど、大丈夫です。ありがとうございます」

「お世話になりました」

「本当にご迷惑をお掛けしてすみません」

私は村長さんにべこりと頭を下げた。お母さんとイーナさんも一緒に頭を下げる。

「うむ。ガイはちゃんと謝ったかな」

「……えーと」

私が小首を傾げると、ガイは慌てた。

「あやまったよ!? あやまったよな、オレ」

まあ、一応謝ってはいたかな。ガイで遊ぶのはやめて、領いてあげる。

「まあ良からう」

村長さんはマントの男と騎士の一団へ向き直った。

「お待ちいたしました。この子が最後の一人です。ガイ。こちらの方々が、都からいらつしやつた魔術師殿と、護衛の騎士様じゃ。ご挨拶せい」

ガイだけを手招く村長さんを見て、私はホッとした。やっぱり私は対象外。

魔術師がニコリと笑い、ガイに水晶玉に手を置くよう促した。水晶で魔力測定か。光ると魔力持ちちつていう証明になるアレかな。定番だね、と思いながら、目を向けて絶句した。

ナニアレ。

大きな水晶玉が、収穫野菜を運ぶ木箱の上に、クッションを敷かれて置かれていた。それはいいのだがしかし、なぜ水晶の中に小人がいる？ それも四人。それぞれ赤、青、黄、緑のチュニツクを着た三頭身が、つぶらな瞳でこちらを凝視している。私は後ろを振り返った。

誰もいないし……やっぱり私か？

正面に向き直ると、まだ凝視されていた。

……可愛い。



っは！ いや待て私。アレはきつと厄介事の使者。デレてはダメだ。

そうこうしているうちに、ガイがおそろのおそろ水晶玉に手を置く。すると、赤い服の小人がピクリと反応した。ガイを見上げ、ちっちゃな両手を伸ばして振り回す。

カ、カワイイー!! 何あれ何あれ、カワイすぎるんですけど！

思わずガン見。周囲もざわめいた。そりゃあ、かぁーいーものね。

「光った！」

「魔力持ちだ」

「ええ！ 嘘、合格って事!」

光った？ みんなは水晶玉が光ったと言って興奮している。確かに赤く光っているようにも見えないけど、小人の可愛さに興奮したのは私だけだった。ひよっとしてみんなには小人が見えていないのかな。

「赤く光っていますので、火の精霊との相性が良いですね。輝きもなかなか強い。魔力が高いようです」

魔術師が嬉しそうに解説してくれる。ガイが手を離すと、小人も手を下ろした。

私以外の人には、水晶玉が光って見えていただけらしい。赤色の光は火の精霊との相性が良いと言う。——ひよっとして、小人は精霊なのだろうか。赤い服の子は嬉しそうだったし。

けど、なんで私、いきなり視^みえるようになったんだろう。確か精霊を視^みるには特別な目が必要だったはず。

魔法を使うクーガーさんの周りでも、これまで火の精霊を視た覚えはない。前世の記憶が戻ったから視えるようになったのかな？

「じゃあオレ、学園に入れるんだな」

「ええ。この村からはあなただけです。しっかり学んでください」

「オレだけ？ ミラも調べてくれよ」

ガイが私を振り返り、周りもこちらを見る。注目再び。だから私は五歳だつてば。

「名簿によれば、彼が最後だが」

他の三人より少し年配の騎士が、羊皮紙を手に村長さんに確認を取る。

「ええ。ミラはまだ五歳ですから」

「十日後には六歳じゃん」

「じゃが試験を受けるのは、六歳以上と決まっておるからのお」

「いえ、今年六歳以上になる子供ですよ」

魔術師の訂正に、村長さんはほかんと口を開けた。お母さんもイーナさんも啞然としてた。

大人達は長年、試験の時点で六歳になっていなければ受けられないと思っていたようだ。

「なー、結局ミラは試験受けるのか？」

黙れおバカ。ああ、三年の猶予がなくなってしまった。黙つてたら受けずに済んだのにー。

「はい、君も水晶玉に手を置いて」

魔術師に促されては逃げられない。観念して前に出ると、小人達——推定精霊達が、キラキラ

した笑顔で迎えてくれる。そんな期待いっぱいな目で見ないで欲しい。

精霊達はそれぞれ服と同じ色合いの髪と瞳をしていて、耳の先が尖っている。遠目には色違いのチュニックに見えたが、フリルが入っていたり、アクセサリーを着けていたりして、なかなかお洒落さんだ。私は覚悟を決めて、水晶に手を置いた。

「おおー！」

「なんだこれは」

ガイの時とは違う反応だ。精霊達は……全員踊りまくっていた。

「……よ、四色の乱舞!？」

精霊達は飛び跳ね、手を振り、水晶玉の中をクルクル回っている。大はしゃぎだ。みんなには四色の光が、かわるがわる点滅して見えるらしい。

チートキター!!

「何という輝き」

魔術師がガツチリと私の手を握る。

「ようこそ、フイーメリア王国魔術学園へ」

「あははは」

もう笑うしかないね。

水晶玉から私の手が離れ、踊るのをやめた精霊達は互いにハイタッチを交わす。愛らしくも小憎らしい。ええい、この小悪魔共め。

「この子達が魔術師……ですか」

村長さんからの伝令によって試験結果を知らされ、仕事を早退して来た両家の父親はそろって嘸然としていた。

私達は今、私の家でガイの家族共々、マント男、もといスイン・クルヤード氏に学園への入学手続きのための説明を受けている。試験の時にいた騎士様達は、村長さんと一緒に帰っていった。

「ええ。ガイ君は火属性、ミラさんは四属性すべての適性を持っています。つきましては魔術学園での学習によって資質を伸ばし、いずれは魔法騎士か宮廷魔術師を目指していただければと思います。通常ですと、魔法の習得には精霊協会に習得料を払う必要がありますが、学園は国立ですので国が支払います。そして魔力測定試験による合格者は在学中の学費、寮費、その他の費用すべて、国と支援者となる貴族が負担いたします」

立て板に水の如く説明を始めたスインさんだったが、ここで一度言葉を区切った。

精霊協会は知っている。どこの村にも規模は違えど必ずあって、魔法を管理している施設の事だ。生活にお役立ちの魔法から戦闘用魔法まで、あらゆるものを扱っているらしい。でもイルガ村じゃ役場に近い扱いだ。だって魔法を使える人がほとんどいない。私が知っているのはクーガーさんぐらいだ。

新たに習得する人がいないなら、教える人も必要なくなるという事で、ここ数年王都から派遣されることもなかった。窓口係のおじいちゃんは、村人その一と呼べそうな一般人である。あ、たし

かハンターギルドの窓口も兼任してたかな。魔物は滅多に持ち込まれないけど。たまーに出没する、群れからはぐれたらしい魔獣——イノシシとかシカの変化したもの——の肉は、村人の胃の中に収まっちゃうしね。

「あの、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫です」

「いやその、うちの倅がまさか試験に通るような魔力持ちとは思ってもみなくて、その……」

「わかります。けれど今の世では、魔力は貴族だけが持つものではありません。暗黒期以降、魔術師の血は広く民の血と交わったのですから」

説明が途切れたのは、呆気に取られている父親達が気になったからだだったらしい。スインさんは二十代前半の見た目に似合わぬ落ち着きで頷いた。

「じゃが、血は薄まっておる。多少の魔力持ちでは学園には入れぬ足切り制度があると聞いた覚えがあるんじゃないか」

「そうなの？ おじいちゃん」

「暗黒期」という単語に疑問を覚えたけど、質問のタイミングを逃してしまっただけだからしかたない。後で聞こう。さしあたって学園の入学条件の方が気になる。魔力があれば全員入れるわけじゃないのか。

「うむ。クーガーは昔試験に通らなんだが、当時の試験官であった魔術師殿が言っておったのだ」
おじいちゃんは重々しく頷いて、クーガーさんが学園には入れなかった事を教えてくれた。

「通らなかつたからと言って魔力が全くないとは限らぬから、身分証を作る機会があれば、魔力値を確認するようにな。実際、隣村との交易のために通商用カードを作らせてみれば、多少の魔力はあったのじゃ。だからあやつはハンターに弟子入りし、修業して魔法を使えるようになったのじゃよ」

ハンターとはハンターギルドに所属し、依頼を受けて魔獣や魔物の討伐、商隊の護衛や薬草の採取などを請け負う人達の事を言う。能力順にランク分けがされていて、最初はみんなFランク。実績を積んでE、Eプラスと上がっていき、Sランクが最高ランクとなる。ちなみにSランクは人外レベルだそう。

つまりは魔法とかバンバンぶちかます、魔王みたいな人なのかな？ って、そこまで考えて気がついた。私つては魔力チートなんだから、Sランクを目指そうと思えば目指せるんじゃないのかな。そしたらいずれ左団扇な生活が出来るかも！

トラブルが舞い込む事は置いておいて、前向きにチートを活用する事を考えるも、すぐに問題点に気がついた。

戦えないじゃん私。護身術をかじった事もないよ。

魔力チートだけど、魔力頼みの大技しか使えないんじゃ、後方からの攻撃しか出来ないし、場合によっては当たらない事もある。かと言って、前線に出て敵の間合いに入ってしまったら、私みたいな運動神経のない人間は逃げたくても体が動かないだろう。

たとえ薬草採取であつても魔獣に遭遇しないとは限らない。あらゆる戦闘技能必須の職業だった。

ハンターになるなど夢のまた夢、やはり堅実に宮廷魔術師を目指すのが一番か。

過去に行われていたという足切り制度の事をサインさんに尋ねると、彼は苦笑した。

「足切りは今もあります。学園のレベルを一定以上に保つ目的もありますが、世知辛い事に、予算や支援する貴族の問題でもありますよ」

村を出て学園に入った子供達は基本的には国の支援を受けるが、里親のように密接なサポート支援を行うのは貴族だそう。学生寮に入らず、支援者である貴族の屋敷から学園に通う子供もいる。貴族は優秀な子を支援する事がステータスとなっていて、ゆえに、誰でも無制限に受け入れてくれるわけではない。国の財源にも限りはある。これらの理由から、一定以上の魔力がなければ水晶は反応しないようになっていそう。

水晶が光る、イコール「魔力持ち」なわけではなく、イコール「基準値以上の魔力持ち」が正しいのだと言う。

その反面、費用の一切を自費で賄えるお貴族様には足切りなどない。

貴族は血筋ゆえに一定以上の魔力を持っている子供が大半だが、仮に魔力が低い場合は二通りの道がある。鍛え上げてくれ、と学園の魔術師クラスか魔法騎士クラスでしごかれるスパルタコースと、恥をかきたくないなら武を極めると、魔力の必要ない騎士学校でしごかれるコース。

どちらを選んでもしごかれるとは、貴族の子つてのは大変だね。

「水晶の反応からして、ガイ君とミラさんの魔力は学園入学予定者の中でも上位に入るでしょう。

特にミラさんの四属性持ちというのは希少ですから、学園入学の書類にサインをいただけましたら

すぐにでも上司に報告したいと思つています。支援者として名乗りを上げるであろう貴族を選定する必要がありませんから」

そう言つてスインさんは四枚の羊皮紙を取り出した。装飾過剰なアルファベットもどきがびつりと書き込まれている。

うわー、これがこの世界の文字か。学校に通うなら覚えなきゃいけないだよな。大丈夫かな。前世じゃ英語は大の苦手教科だったんだけど。あ、アラビア数字発見。ラッキー。これで十進法なら計算は楽勝だ。四則演算に暗算どんとこい！

「それぞれのご家族と学園側の方です。学園側のサインは私が代行いたします。内容をご確認ください」

お父さん達は羊皮紙を手に取り、じつくりと読み始めた。

私が真剣な表情のお父さんの顔を見上げたり、読めない書類を隣から覗き込んだりしていると、ぽんと大きな手が私の頭の上に乗った。お父さんの手だった。

「行きたいか？」

私は首を傾げる。

「行かないといけないんじゃないの？」

お父さんは少しだけ困つたように笑つた。

試験に合格したら、絶対に学園へ入学しないといけないわけじゃないだろうか。スインさんを見上げて、彼も微笑むだけで何も言わない。

「オレは行く！ ミフは行きたくないか？ 絶対イヤか？」

ガイが私の手を取つて、じつと見つめてきた。私は今度は反対側に首を傾げる。

行きたいか、行きたくないか。そりゃ出来ることなら行きたくないけど、改めて自問してみる。

魔力チートである以上、今後その副産物である面倒事は嫌でも舞い込んでしまうだろう。その対応策は学んでおきたい。ここで拒めば、今後先ほど聞いたような好条件で魔法を学ぶ場を得るのは難しいだろうし……

「行く」

戦闘職は論外だけど、宮廷魔術師としてチートを上手く生かせば、高収入を得られるかもしれない。日本での生活ほどは無理でも、かなりいい暮らしを望めるかもしれないし、仕送りが出来れば親孝行出来る。

「行ってもいい？ お父さん」

見上げると、お父さんはもう一度頭をなでてくれた。

「わかった。行つてこい」

そうと決まれば実家で用意して持たせた方がいい物とか、夏休みや冬休みに帰省する事はあるのか、その際の費用はどこが持つのか等々、細々した質疑応答が交わされた。そして最終的にサインする事になった。

「さて、では私はそろそろお暇いたします。村長さんのお家に泊めていただく事になっておりますので。三日後には出発の予定です。その間に何か質問等ございましたら、お気軽に声をかけてくだ

さう」

スインさんは貴族なのに終始偉ぶる事なく、丁寧に頭を下げて家を出て行った。私達も深く頭を下げて見送って、彼の背中が見えなくなつてから行動を開始した。すなわち買い出しである。

今日は十二月の第一週二日。新年を迎え、一月第三週一日から新学期開始だ。イルガ村から王都までは馬車で五日もあれば着くらしいけど、支度金でもある助成金の到着を待つて準備を始めていたのでは、授業開始までに王都に辿り着けないかもしれないらしい。

支援者が決まれば挨拶もしなければいけないから、その日程も考慮して村を出発する必要がある。そんなわけで、貯蓄を切り崩して旅の準備をする事になった。乗合馬車代だけは、助成金がないと厳しいみたいだけだ。

方々に手配し、一ヶ月後の出発日の三日前にはすべて揃う手筈を整えて、家族団欒で夕食を囲んでいると、スインさんが調査隊隊長のルー・ペン・ス・キーンさんを伴って、再び我が家を訪ねて来た。

「急な話で申し訳ないのですが、三日後の我々の出立に同道していただけますか？」

「上司に連絡をしましたところ、四属性のお嬢さんを護衛して戻ってこいと命じられています」

スインさんの言葉を補うように、隊長さんは言った。

「それは頼もしくてありがたいお話ですが、三日後ですと物資の手配が間に合うかどうか」

お父さんが難しい顔をする。

この世界の旅は前世のお手軽な旅行と違って時間もかかるし、獣はもちろん、野盗に魔物、魔獣

と遭遇する可能性もあって、危険がいつぱいだ。だから乗合馬車は御者に武術の心得があったり、

ハンターを護衛に雇っていたりして、その分が料金に加算されている。つまり馬車代は高いのだ。

けれどスインさん達は一行の馬車に乗せて行ってくれると言う。学園出身の魔術師と現役騎士の護衛付きだ。

「物資の手配は可能な限りで構いません。我々には非常用の携帯食がありますし、食料は次の村でも買い足します。子供達に必要な物も、道中適宜購入して行きますので」

「無理をお願ひしますので、費用はもちろん我々が負担しますし、支援者が決定するまでの滞在先はクルヤード家が引き受けさせていただきます」

物資は隊長さんが手配し、王都での滞在先はスインさんが請け負ってくれると言う。

私は父の袖を引いて、「その方が安全なんだよね」と聞いた。父は黙って頷く。

「なら、騎士様達と一緒に行くよ」

両親や村に心配をかけずに済むなら、準備期間の短さは甘んじて受け入れましょう。六歳の誕生日を家族と一緒に過ごせなくなったのは寂しいけれど、今生の別れになるわけじゃない。

第二話

そんなわけで、馬車の旅なう。

同乗者は魔術師スイン・クルヤードさんとガイ、そして四人の精霊達。御者役の騎士はバナマさん。軍馬に乗って馬車の左側を警護するのは、ルーペンス・キーナン隊長。右側に騎士二行の最少、グゼさん。後方担当はブルムさん。

出発までおよそ一ヶ月あった準備期間を大幅に短縮し、スインさん達と同道する事になった私とガイは、試験の三日後に村を出た。調査隊の巡回はイルガ村が最終だったから、後は五日かけて王都に帰るだけ。といってもずっと馬車に乗っているというわけではなく、村や町があれば立ち寄って食料なんかを買い込むし、宿にも泊まる。

とりあえず次の村まで約二日はかかる。

急な出発にもかかわらず、村人達があればこれもと饑別代わりに色々くれたから、非常食に手を出さないでもよくなったと隊長さんが言っていた。ありがたい事である。

昼食を取る予定地点まで、馬車にガタゴト揺られる。初めての遠出に興奮していたのは最初のうちだけ。変化の乏しい道に飽きた現在、馬車内では魔術の基礎講座が開かれていた。

「魔術とは術者がイメージした現象を、糧となる魔力と引き替えに、精霊達に起こしてもらいものです。人間にに応じてくれる精霊は四種族おり、それぞれ火・水・風・地を操り、各属性の魔術を火魔法・水魔法・風魔法・地魔法と呼びます」

話題の精霊達とはいえば、試験の時に入っていた水晶玉の中から出て、好き勝手に遊んでいる。

「イメージが明確でないと、精霊は術者の望みを叶えられません。また、魔力が足りなければ、どんなに明確にイメージしても、魔力に応じて規模でしか実行出来ません。そして精霊の種族ごとに

魔力の味の好みがあり、魔術師の魔力属性は、これによって分類されます」

「つまり、オレの魔力は火の精霊が好きなの味って事か？」

手を挙げて問うガイに、スインさんは肯定する。

「ええ。ミラさんのように、すべての精霊に好かれる方は極稀です。ですので、火属性の魔術師が水の魔法を使いたい時は、水属性の魔術師が魔力を込めた魔道具か、魔石を使います」

「魔道具か魔石？」

「魔力の使い道が決められている道具を魔道具と呼びます。例えば……試験の際に使っていた水晶玉は、各属性の魔術師が魔力を込め、試験判定を精霊に願った魔道具です」

まさかの精霊式コックリさん。

「使い道を自分で決められるのが、魔石。魔獣や魔物の核であり、彼らが有していた魔力が込められています。それを使い切っても、属性に合った魔力を込める事が可能です。チャージ回数に限度はありますがね」

リサイクル可ですか。エコですね。

スインさんが左腕をローブから出す。年中ローブを着込んでいるのか、なまっちょろい腕だ。その腕には、赤、青、緑の石がついた腕輪が嵌められていた。

「青い石が水の魔石です」

「なら、赤いのが火だろ」

「その通り。では緑は何だと思えますか」

「うーん」

腕組みして悩むガイに微笑んで、スインさんは先ほどからだんまりしている私に目をやり、ギョツとした。

「ミ、ミラさん、顔色が悪いですが……」

「……はく」

私は根性で馬車の後ろに駆け寄り、リバースした。

村を出て、馬車に揺られる事三時間。見事に馬車酔いしました。遊んでいる精霊達を眺めたり、魔術講座に集中したりしてみただけれど、抵抗虚しく完敗。だって凄く揺れるんだもん。

道は舗装なんてされてないから、めっちゃ揺れる。仮に舗装されていても、前世でよく車酔いしていた私は酔ったかもだけど。

考えたら、今まで馬車に乗った事なんてなかったんだよね。馬車は村長さんの家に一台しかない。町に用事がある人達の中で代表者を決め、その人が馬車に乗って行くのだ。町に用のない私に乗る機会はなかった。ガイはピンピンしてるけど、あんな野生児と一緒にされてはかなわない。なんせ奴は、ターザンごっこ的な遊びが大好きなのだ。三平規管がバケモノである。

「ほら、水だ」

馬車を止め、パナマさんが革袋をくれる。

「ありがとうございます」

息も絶え絶えに礼を言い、水を口に含んで酸っぱいものを無理矢理飲み下した。すすいでもう一

口飲みたいが、我慢だ。旅において水は貴重品。

「口の中酸っぱいだろ。すすいでいいぞ」

「でも……」

「グゼが水属性だから、足りなければ作らせる。心配しなくていい」

凄いな水属性。水を作れるんだ。お言葉に甘えて口をすすぎ、最後にもう一口水を飲んだ。

「もう大丈夫かな？」

馬車を降りたスインさんに聞かれて頷くと、彼は私が地面に吐いた諸々に向かって右手を上げた。

「では、地魔法の実践です」

気分の悪さも忘れて凝視する。ガイも身を乗り出した。

「我が魔力を糧に成せ」

その言葉と共に、手の平から黄色い光が珠となって顕れる。それを見た黄色い服の精霊が、ぴよいつと馬車から飛び出て、光の珠を食べた。

「大地に溝を」

精霊が片手を振り上げ、スインさんの呪文と共に振り下ろす。ザクツと音を立て吐瀉物の載る地面がへこみ、へこんだ分の土がその側面に山を作る。スインさんは山を踏み崩して、溝を埋め戻した。

「はい、おしまい」

最後は人力ですか。てか、せっかく呪文の前半はカッコいいのに、後半がイマイチだ。ここは

やつぱり『大地溝』とか……つて中二病が再発!?

「野営地でのゴミや、狩った動物の血抜きをした場所なんかは、ああして埋めるのがマナーだ。そのままにしておく、獣や魔獣が寄ってくる」

パナマさんの解説に、私はガイと共に頷いた。

「もっとも、魔獣や魔物を倒すと魔石が手に入るから、路銀や魔石が心もとなくなれば、ワザと呼び寄せる」

おい。

「手に負えないのが来る危険もあるから、勧めはしませんかね」

馬車へ乗り込んだスインさんが、一言加えた。やつぱり危ないんじゃないか。私達がいる間は、ご遠慮頂きたい。路銀も魔石も節約に協力は惜しみません。

「そうだな、ハンターギルドでSランクなら余裕だ」

「Sつて、世界で五人しかいないっていう最強連中じゃないっすか」

グゼさんからパナマさんにツツコミが入った。そしてSランクの話題で思い出したのか、ブルムさんから「そういえば」と声が上がった。

「今朝、定期報告で来た伝達鳥で聞いたんだが、先日の魔力喰らいの複数目撃情報の件、近隣の村から合同で、Sランクのハンターに調査と討伐の依頼が出されたらしい」

「マジですか、ブルム先輩」

「ああ」

グゼさんの問いに、ブルムさんが頷く。

「魔力喰らいが目撃されたのは確か、この丘を越えて馬車で一日西に進んだ先の森だったはずだ。

だがSランクは五人とも遠方で作事中だから、すぐには動けないらしい。代わりにBランクの十人がその依頼を受けたそうだが……」

「おいおい、そんな情報が入ってたら報告しとけ。目撃現場から距離があると言っても念のためな」

「すいません隊長」

ブルムさんは申し訳なさそうに謝罪した。

何やら大変な話みたいだね。

それにしても、この世界に“報連相”の概念はないんだろうか。報告・連絡・相談は大事だよ？電話がなくともせつかく魔法という通信手段があるんだから、もっと活用すべきだと思う。

ちなみに、伝達鳥というのは通信魔法の一つだ。相手に届くまで少し時間のかかるところは手紙に似ている。スインさんの説明によれば、情報の正確性を保つため、顔見知りの風属性同士でしかやり取りできないらしい。魔石では行使出来ない特別な魔法なんだとか。

「しかし魔力喰らいが複数いるなら、せめてAランク十人だろ。真偽の調査だけならともかく、下手に手を出して討ち漏らしがコッチに来たりしねーだろな」

「縁起の悪い事言わんでくださいよ、キーン隊長」

グゼさんが顔を悪くして訴えるのに、私は心の中で同意した。

「そうだそうだ。噂をすれば影がさす。って諺を知らないのか。もしくはフラグが立つとも言う。わかった！」

突然声を上げたガイに、みんなの視線が集まった。

「緑は地だ！」

まだ考えてたのか。

「……風じゃないの？」

「緑の大地って言うじゃん」

「それは植物を指すんじゃない、ガイ」

スインさんは「地魔法」を使うと言っていた。彼の手から顕れた魔力は黄色かったし、応じた精霊も黄色の服を着ていた。何より、呪文が「我が魔力を糧に」だ。

「ミラさんが正解です。ひよっとして、魔力が視えていますか？」

スインさんの問いに、私は内心焦った。

どうしよう。後半の推測だけを言うべきだろうか。いや待て。それだって、五歳児の考える事？既に「全属性持ち」なんてチートが発覚してるし、今更魔力が視えるつのが増えても変わりないような気もする。全属性持ちは滅多にいないけど、多少記録があるらしいし。

ひよっとして視えるのも共通点とか。でも魔力どころか精霊も視えている事がバレると、更なる面倒事が起きそう。

なんせ五歳にして親と別れ、魔術学園なんて所へ向かってるのだ。マッドな研究者に捕まって、

「魔術の未来のために！」とか言つて研究材料にされたりして。しかも相手が貴族だったら下手に抵抗出来ない。私はしががない農家の娘だ。

対策としては、権力者に後見人になってもらうとか？ 権力を振りかざす輩は、権力に弱いだろうし。

しかし借りを作りすぎると、動く砲台として戦地に駆り出される恐れもある。実験材料は嫌だが、兵器扱いも嫌だ。

「えと、……………カン？」

やっぱり怖くてカミングアウトならず。優柔不断で悪いかー！

「カン、ですか」

スインさんは訝しんでいたけれど、隊長さんの鶴の一声で追及されずにすんだ。

「いつまでも立ち止まっているわけにもいかねえし、出発するぞ。嬢ちゃんは寝てろ」
てなわけで、馬車の旅再開です。私はグロッキーから回復しきっていないので、隊長さんの言うとおりに壁に向かって毛布に包まり、オヤスミモードに入る。だがしかし馬車の揺れが収まるわけでもなく、羊を数えたところで眠れやしないのだった。

あー揺れない方法はないものか。風魔法で空中浮遊——あつという間に魔力切れしそうだ。地魔法で砂鉄を集めてバネを形成——馬車のどこについたらサスペンションになるか不明。てか、サスペンションの詳しい構造も知らないや。

良くある異世界転生物語なら、現代知識を活かして無双なんて展開があるけれど、あいにく穴だ

らかな私の記憶。

自分の事以外なら割と思い出せるんだけど、現代道具を効率良く使う方法なんて役に立つだろうか？ 私は無理だと思っうね。針金ハンガーを歪めて、ストッキング被せて隙間掃除ーなんて、この世界でどう活かせと？

そもそも針金ハンガーは魔法で作れそうだけど、ストッキングなんて見た事ないよ。都会の人は持つてるかもだけど、高級品だろう。そんなもの掃除に使えるか、もったいない！ ていうか、掃除道具は今必要ないし。

うだうだしていると、地の精霊が寄って来た。首を傾げ——三頭身だから身体ごと傾いて、ミラムシ状態の私を覗き込むと、おもむろに私の頭をなで始めた。

なんか気持ちいいかもー。かすかにストロベリーの香りがして、心を和ませる。アロマテラピーみたいだ。

ふむ。アロマと言えば、車酔いにはペパーミントだったか。ハーブ料理があるから、ミントはありそうだけど、効能も同じかはわからない。

「スインさん、何か気分がスッキリする香りの物はないですか？」

ころりと転がって壁から離れ、遠回しに聞いてみた。

「スッキリする香りですか」

彼は頷に手をやり、考えこむ。

「子供はタバコ吸えないしな」

「煙いのは嫌いです」

御者席からの声に、間髪を容れずに拒否しておく。

「そうだ、タバコです」

いやいや、スインさん。貴方聞いてましたか？ タバコは嫌いなんです。てか、五歳なんで吸っちゃダメです。

「タバコには、ミントが入ってます」

おや。こつちの世界にも、ミント入りタバコがあるんだ。問題は生の葉っぱがあるかどうか。タバコを解体した物は、ニコチン臭がしそうだ。

スインさんは食材を入れた保冷箱をあさりだした。ほわほわと白い煙が箱から溢れてくる。保冷箱は魔石を使った冷蔵庫のようなものだ。もともと性能は入れておけば長持ちする程度だし、手早く出し入れしないとあつという間に外気と等しくなってしまう。

「ありました」

差し出された葉っぱを受け取って、匂いを嗅いでみる。うん、前世のものと同じ匂いだ。少し干切って口に入れる。お子様の舌だからか、苦く感じる。残りを手に包み込んで鼻先に持つて来ると、「食べないんですか？」と聞かれた。

「苦かったから、香りだけ楽しみます」

「そうですか」

スインさんは微笑んで私の頭をひとなでし、元の位置に座った。

目を閉じてゆっくり深呼吸すると、爽やかな香りが鼻腔を通る。ふと気配を感じて目を開ければ、風と地の精霊がすぐ側において、ミントを包む私の手に触れた。とたん、ふわりとミントが強く香る。かすかにカスタードとストロベリーの香りもする。それらから連想したのは苺ミルクフィューユのミント添えだった。

ひよっとして、精霊が魔法を使うと香りがするのだろうか。お菓子の香りの精霊か。可愛い彼らにはお似合いだ。小さく笑った私は、口の中で「ありがとう」と呟いた。

地の精霊がキョトンとする。風の精霊が嬉しそうに笑って、地の精霊に何か伝えた。至近距離なのに、なぜか私には聞こえない。声を聴くには、違う素質がいるのだろうか。

地の精霊が風の精霊に頷き、私に向かってにぱっと笑う。

ん？ ひよっとして、さっきのお礼は風の精霊にしか聞こえなかったのかな。で、通訳してくれたって事？ むう。スインさんに聞くわけにもいかないし、そういう事でいいか。

「さて、では講義の続きをしましょうか」

「はい！ その前に質問」

ガイが基礎魔術講座再開の声を遮った。

「なんですか、ガイ君」

「さっき言ってた、まりよくぐらいつて何？」

「魔獣の一種ですが……魔獣とは何か知っていますか？」

ガイは首を横に振った。

「魔獣は多くの生き物の死や怨みなどで汚染された魔力の影響を受け、動物が変化した物です。魔法は使いませんが、魔力による身体強化で通常の獣よりも力が強く、凶暴です。獣と魔獣を見分けるのは、少し困難ですね。攻撃されてからでないこと、破壊力がわかりませんから。魔力喰らいは特殊で、魔力を持つ物質だけではなく、魔力自体も糧にします」

「魔力を喰らうて事は、もとは精霊だったのか？」

同じにするなど言わんばかりに、精霊達がブンブンと頭を振った。

「いえ、それはわかっていないんです。しいて言えばワニのような姿ですが、ワニはあそこまで巨大ではありませんし……どちらかと言えば、魔物に近いのかもしれない。どんな属性の魔力であろうと食べてしまいますしね。魔法を使わないので、魔獣に分類されていますが」

「まもの？」

「基本的には魔法を使う知性がある、人族以外のモノとされています。ドラゴンも獣と言いますが、魔法を使える種と使えない種があり、魔法を使う種は魔物に分類されます。かなり大雑把な分類ですね」

スインさんは苦笑いした。

「魔物は魔力を糧とし、精霊に力を借りる事なく単独で魔法を使います。殺した生き物を取り込む事で肉体を変化させる魔物もいますね」

ぞくりと背筋が震えた。

「えと、魔力喰らいは噛みついてくるのか？」

ガイも少々青ざめている。凶太い彼も、さすがに怖かったようだ。魔力喰らいに話を戻そうとする彼に、スインさんは微笑んだ。でも、戻したところで楽しい話ではない。身を護るためには聞いておかなければならない大事な話だけだ。

「魔力喰らいは噛みつく事で、獲物から魔力を強制的に吸い上げます。精霊は術者の命にかかわるような魔力の枯渇状態には絶対しませんが、魔力喰らいは獲物が死ぬまで離しません」

「コワ！ 魔力が枯渇すると死んでしまうのか。いや、魔力喰らいは噛みつくのだから、場所によつては失血死という可能性もある。」

「魔石や魔道具に噛みつかれば、宿る魔力を奪われて修復不可能なまでに破壊されます。魔力弾はもちろん、魔法での攻撃も、魔力を纏っていますからね。炎は消え、風は霧散し、水や土は砕け落ちます。通用するのは剣ですが、鋭い爪と牙を持つ巨体相手に戦うとなると、それ相応のダメージを覚悟しなければいけません」

とんでもない魔獣のようだ。ハンターギルドのBランクがどの程度の使い手なのか知らないけれど、そんな化け物が本当に複数匹うろついていたらとして、十人ぼっちで殲滅出来るんだろうか。最初はSランクに依頼があったらしいのに、他の仕事で動けないだなんてちよつと不満だ。ギルドの掟に先行契約遵守とかいう項目でもあるのだろうか。

まったくもう、人命を優先してよ。

「もし出くわしたら、倒せる？」

「……………」

わー！ わー！ わー！！

ガイの無邪気な問いに場が凍った。幼子って怖い。なんて答えにくい事を聞くんだ。

「ムリ？」

「……………」

空気を読め！ 倒せませんなんて、言えるわけないだろう！

あ、失礼。隊長さん達が弱いとは言いませんよ？ でもスインさんの魔法はさっきの廃棄物処理しか見てないし。それに、「縁起の悪い事言わんでください」ってグゼさんは言ってたんだよ。出会うと縁起が悪いんだよ？ 余裕で倒せるなら、そんな言い方しないよね。

「……全力で逃げる事になると思います」

だよねー。ああ。なんだか嫌な予感がある。遭遇フラグが立ってしまった気がする。

不安で頭と胃がぐるぐるし始めた。ミントを握った手に思わず力を入れると、宥めるように頭をなでる手があった。水の精霊だ。ポンポンと背中を叩くのは火の精霊。思考が落ち着いて、身体がぼかぼかしてくる。そして今度はキャラメルとミルクチョコレートの香りがした。

やっばりお菓子の匂いだ。水の精霊と火の精霊、どっちがどっちの香りなんだろう。

身体を温められたせいか睡魔がやって来た。馬車酔いで疲れた五歳児の身体は、あっけなく睡魔に降伏したのだった。

スープの香りがして、目が覚めた。馬車の中には私一人で、ガイもスインさんも、パナマさんもない。あ、水と風の精霊は、馬車の降り口に腰掛けていた。

私が起きた事に風の精霊が気づき、手招きする。精霊と一緒に外を見ると、一行がお昼ご飯の準備をしていた。竈かまどが作られていて、スープ鍋が火にかけられている。鍋をかき混ぜているのはスインさんだ。

魔術師に鍋。ププツ。似合いすぎ。

パナマさんは串に刺したパンを炙あぶっている。ガイは食器とスプーンを手にスタンバイ。うん、君は食べるの専門だもんね。五歳児の私もだけど。

地の精霊は竈かまどに腰掛けていて、火の精霊は燃える火を覗き込み、楽しそうにステップを踏んでいった。あの子達が竈かまどを作ったのかもしれない。

木立の中から、グゼさんとブルムさんが枯れ枝を手に戻って来た。そして、馬車の陰からは隊長さんがやって来る。地図を手に行っているから、道を確認して来たのだろう。

「目が覚めたかい、嬢ちゃん」

私に気づいた隊長さんは、抱っこして馬車から降ろしてくれた。

「気分はどうだい？」

「大丈夫です。眠ったら、だいぶ良くなりました」

精霊達のおかげだ。眠れたのも身体が怠だるくなかったのも、精霊達がなでくれたからだ。たぶん回復系の魔法を使ってくれたのだと思う。魔力をあげてないのに、優しい子達だ。

ガイの隣に腰掛けて、スープの入った木の器うつわをもらう。スプーンも木製だ。軽く炙あぶってもまだ硬いパンはスープに浸ひたし、柔らかくしてから食べる。

「ではいただきますよう」

スインさんがそう言うやいなや、ガイは硬いパンを物ともせず、少しスープに浸ひたただけで食べってしまう。

「ガイ、ゆっくり食べないと喉につまるよ」

一応注意を促うながして、私はスープを啜すすった。

そういえば、精霊達に食事は必要ないんだろうか。魔力を食べるのは、魔術師の要請を受けて魔法を使う時だけ？ さつき、頼んでないのに魔法を使ってくれたから、お礼として魔力をあげてもいいんじゃないかな。

渡し方は……スインさんに聞くと藪蛇やぶへびになりそうだ。魔法物の小説を参考にするなら、確か気の流ながれをイメージするという描写があった。

ふっふっふ。気功なら知ってますよ。ちょっと調べた事があります。でも凄く奥が深くて私が知っているのは、ほんのさわり程度だ。ただ、この場合必要なのは正確な知識ではないだろう。魔

法はイメージが重要って、スインさんも言ってたし。読みあさっていた漫画や小説、アニメにも魔法物が沢山あったから、その手のイメージはお手の物だ。

あやふやな知識を想像力で補完する。気を魔力と仮定して体内に巡らせて練り上げ、右人差し指の先に集める感じでどうだろう。

パンを味わいながら、目を伏せて早速トライ。

えーと、まずは深呼吸。

私は胸に魔力の珠をイメージすると、胸元から順に巡らせた。

しばらく続けていると、何か温かいモノが感じられた。これが魔力だろうか。私は魔力の珠のイメージを体内に巡らせるのをやめて、珠が右肩を通り、腕を通り、人差し指の先に流れ込むのをイメージした。温かなモノも一緒に移動する。

目を開けて確認すれば、指先が蜜色に光っていた。うまくいった。

「ミラさん？」

「！ つはい」

いきなりスインさんに呼ばれて、集中が解ける。光が霧散した。

び、びつくりした。バレた？ バレたの？

挙動不審な私に「また気分が悪くなったのかと思ひまして」と優しい言葉をかけてくれるスインさん。

ごめんなさい。「魔力集めました」なんて絶対言えない。

「いえ、ちょっとぼーっとしてました」

「寝ぼけてるのか？」

ナイスだガイ。たまには使える。

集中している間にふやけきってしまったパンを食べて、精霊達を探す。さっきまで竈の周りに居たはずなのにいない。視線を巡らせると、薪の山の近くで固まっていた。私は小首を傾げる。

おしくらまんじゅう？

いや、震えてる。何かに怯えているみたいけど……

私が見ている事に気がついた火の精霊が、焦った顔で何かを訴えた。でもやっぱり声は聞こえない。小さな手が馬車の方を指さした。馬車は丘を背にして止められていて、軛から放たれた馬達かのどかな様子で草をはんでいる。騎士の軍馬も一緒だ。

他の精霊達も、ジェスチャーを交えて訴え始めた。けれどわからない。私が更に首を傾げると、スインさんが再度声をかけてきた。誤魔化そうと振り仰いだ瞬間、脳裏に一瞬文字が浮かんだ。カタカナで三文字。

『キケン』

「え？」

思わず声を出して精霊達を振り返った。彼らが顔を輝かせる。またも脳裏に文字が浮かぶ。今度は二つだ。

『キケン』

『ニゲテ』

パソコンのモニタに表示されるように次々浮かび、徐々に数が増えて私の思考の邪魔をする。

『キケン』『ニゲテ』

『ニゲテ』『アブナイ』

『ニゲテ』『ニゲテ』『ニゲテ』『ニゲテ』『ニゲテ！』

『ミラさん！』

スインさんが私の両肩に手を置いて、向き直らせた。

「どうしたんです、ミラさん」

顔を覗き込んでくるスインさんにどう答えるべきか、警告で埋め尽くされた頭では考えられない。

私は譫言のように呟いた。

「……精霊達が、怯えて……」

「精霊が視えるのですか!？」

『キケン』

『ニゲテ』

『クル!』

「キケンって何。何が来るの!？」

私は更に文字情報を読み取ろうと、強く目を瞑って叫んだ。

『マリヨクグライ!』

同時、轟音が耳をつんざいた。馬の嘶きが大気を切り裂き、全員が馬車を振り返って凍りついた。けれど騎士達は瞬時に抜剣し、ソレに相對する。

「なんてこった。マジで魔力喰らいがお出ましとは」

「なんすか、あのデカさ!」

「ギルドには嚴重抗議ですね」

「まったくだ」

ソレは丘の上から落ちて来たのだろう。大破した馬車の残骸の中、薄汚れながらも黒光りする鱗に覆われた、体長五メートル越えの魔獣が舌なめずりをしていた。

巨大な身体。鋭い爪。厚い舌が蠢く口腔からは、鋸のような牙がぞろりと覗く。サイズは想像以上だったが、スインさんが言っていた通り、魔獣はワニに似ていた。

「おそらく奴は手負いだ。死に物狂いで魔力の強い者を狙って来るだろう。俺達の今の装備では時間稼ぎにしかならんだろうが、スインは子供達を連れて逃げてくれ」

隊長さんの指示で、スインさんが私とガイの腕を引いた。

「ゆつくりで構いません。奴から目を逸らさずに下がって」

頷いて腰を上げる。ふと精霊達を視界の端で捉えると、彼らの目は魔獣に釘づけになって震えていた。魔力喰らいはあらゆる魔力を糧とすると聞いた事を思い出す。

もしかして、精霊も捕食対象!？」

あの子達も連れて行かないと！ だけど私が下手に動けば、魔力喰らいを刺激するかもしれない。そうだ。さつき頭の中に浮かんだ文字を私から精霊に送れないだろうか。

『おいで。こっちにおいで』

じっと見つめて念じるが、精霊達は怯えるばかりで気づかない。それとも送れていないのか。

「ミラ、何してんだ。行くぞ」

ガイが、私の腕を引く。

「わかっている。でもあの子達を置いていけない」

「あの子達って、誰の事だ？」

ああしまった。精霊が視える事は秘密なのに、口が滑った。でもフオローを考えている暇はない。文字が送れないなら、他に何か手は……

そうだ！ 馬車の中で、風の精霊は私が呟いた言葉を聞き取った。もしかしたら……

「こっちに來なさい」

吐息に乗せて、祈るように囁いた。風の精霊が私を振り返る。

届いた！

音は空気の振動。思った通り、風の精霊は音に敏感なんだ。

ポロポロと涙を流しながら、風の精霊は他の三人の服をむんずと掴んで飛んだ。私の胸に飛び込んで来た精霊達を両手で抱きしめるのと同時に、魔獣が咆哮する。

「来るぞ！」

騎士達が魔獣へ向かって駆け出した。私はスインさんに掻っ攫われるように抱き上げられる。「走って！」

スインさんの言葉に、放たれた矢のごとくガイが駆け出した。スインさんも走り出す。

「風よ、魔石を糧に成せ。我らに更なる加速を！」

スインさんの腕輪から緑色の魔力が解放されて、私の腕の中にいる風の精霊が、必死に腕を伸ばして魔力を取り込んだ。とたん、風の補助を受けたのかスピードが増す。

「囲い込め！」

「一撃入れたら即離脱！ 足を止めるな！」

怒号が飛び交い、剣戟の音と魔獣の咆哮が響く。私はスインさんの肩越しに遠く離れた後ろを見やり、息を呑んだ。

グゼさんが魔獣に突き刺した剣を抜こうとした一瞬、尻尾が振られて、はね飛ばされる。

隙を逃さず、逆サイドから隊長さんとパナさんが更に足に剣を打ち込む。悲鳴を上げながら、魔獣は刺された足を振り上げた。

剣を奪われては攻撃手段がなくなる。剣を掴んだまま高く持ち上げられた二人は、上空で魔獣の足を蹴りつけ、剣を引き抜き落下した。受け身を取って素早く転がり、彼らを踏みつぶそうとする魔獣の足を避ける。

『グルオオオオオン！』

苛立たしげに咆哮する魔獣。騎士達を睥睨する目がこちらを捉えたと思った瞬間、総毛立った。

来る。
ドツと地を蹴り、ブルムさんを体当たりで吹き飛ばし、追撃する騎士達に構わずこちらに爆走してくる。

速い。

全身細かな傷と血に覆われ、大きく開かれた顎からは唾液が伝う。逸らされる事のない血走った目に宿っているのは、餓えだ。

奴が狙っているのは、私だ。

そう気がついて血の気が引いた。次に、怒りが満ちた。

「ジョーダンジャナイ」

「ミラさん？」

口端からこぼれた低い声に、スインさんが私の視線をたどって後ろを振り返る。迫り来る魔獣に気づいて、一瞬足を連れさせた。

私は身を振って彼の腕から飛び降り、魔獣に立ちほだかる。私が抱いていた精霊達も、震えながらも地に足を着けた。

「ミラ！ スインさん！」

止まった私達に気づいたガイが叫ぶ。

「何してる！ 逃げる！」

傷だらけになりながらもなお、魔獣を追ってくる隊長さんとパナマさん。骨が折れているみたい

なのに、起き上がるうともがくグゼさんとブルムさん。

「ジョーダンジャナイ」

そう、冗談じゃない。前世では車にはねられて死に、今世は魔獣に喰い殺される？ しかも私だけじゃない。このままだとガイも、スインさんも、みんなみんな……

「チートなんていらぬ。でも、あるなら今ここで奴を倒せっ」

口の中でそう呟き、顔を上げて脳裏に望むモノを描きだす。常人にない魔力は転生時に偶然手にしたか、誰かに与えられたのか。どっちだかわからないけど今はどうでもいい。チートなら魔法が使えるはずだ。むしろ今使えなくてチートと言えるか！

「我が魔力を糧に成せ！」

「ちよ、おい！ まさかスインの真似か!?」

驚きのあまり、隊長さんがつんのめって倒れる。

「え、ミラ、魔法が使えるのか!?」

「いけませんミラさん！ さっき私が作った程度の穴ではどうにもならない！」

そんな事はわかってる。あんなのじゃ足だつて引つ掛かりやしない。

驚愕の声を上げるガイとスインさんを黙殺し、私は魔力の練り上げもそこそこに、その力を前方へ突き出した右手に送った。みるみるうちに蜜色の光は巨大な珠となる。魔力を取り込んだ地の精霊が姿を変えた。三頭身の小人から見上げるほどの長身へ。金色の髪が風になびく。

私は右手を高々と頭上に掲げ、一気に振り下ろした。

立ち読みサンプルはここまで

「障壁！」

大地が振動し、轟音と共にソレは瞬く間に造り出された。幅三メートル、高さ八メートル。下部の厚さ七メートル、上部三メートル。緩く弧を描いた防波堤型の壁。

突然現れた障害物に、魔獣は突進の勢いを殺せず突っ込んだ。だが、高密度の障壁は揺るぎもしない。

「と、止まった。でも駄目です！　いくら頑丈でも、これでは魔力を喰わせるようなもの……」

「本命はこつちじゃないです」

「え？」

スインさんがまじまじと私を見た。けれど私は答えず、壁の向こうにいる魔獣の様子を窺った。ヤツは脳震盪でも起こしたのか、動かない。ただ、何かギシリと軋む音がする。

ニイツと自然と口端が上がった。上々だ。

「三、二、一……ゼロ」

『グアアア！』

カウントゼロに、土砂が崩れる音と絶叫が重なった。続いてドズンツと腹に響く衝撃音。私はゆつくりと歩いて障壁を回り込み、壁のすぐ向こうにある、穴の縁に立った。スインさんにガイ、隊長さん達もおそろおそろ近づいて来る。

みんな言葉もなく見つめている。それもそうだろう。そこにあるのは直径五メートルの口を開けた、深い深い穴だ。穴の底では魔力喰らいがその身を痙攣させている。虫の息といったところか。

